

開催にあたって

領主の居城として、また有事の際の要害として、城は築られました。領主による商工業者の集住促進によって城下町が発展していきます。泰平の江戸時代になっても、大名の居所として城と城下町は藩の中心地でした。旧武蔵国のうち埼玉県域では、忍・川越・岩槻に城下町が発展しました。その一方で、城と城下町が担った軍事基地としての役割は変わらず、「水堀」「空堀」「土塁」のほか、「喰い違い道」「鍵の手道」「丁字路」などの防禦施設によって、交通や生活に著しい制約が課せられました。

時代が江戸幕府から明治新政府の時代に移っても、城下町の都市としての重要性は変わりません。しかし、多くの防禦施設が発展の障害となりました。そうしたなかで、それぞれの城下町は近世からの遺産を継承しつつ、近代化への取組みを推し進めていきます。

本展示では主に絵図と地図から、城下町が近代都市として生まれかわっていく過程を明らかにします。皆さんにとって、この展覧会が3つの城下町を知る手掛かりとなれば幸いです。

平成29年1月

埼玉県立文書館長

プロローグ 藩主の城から市民の城へ

戦国時代以来の歴史を持つ忍^{おし}、川越、岩槻の3城は、徳川幕府の治世下においても江戸防衛上の拠点として重視され、主に譜代大名が入城しました。

しかし、明治維新によって大名による支配が終わると、城は破却され、跡地は公共または民間の利用に供されました。忍城では、明治43年(1910)9月、本丸跡に行田電燈株式会社の火力発電所が竣工^{しゅんこう}し、行田の足袋産業^{たびひ}に動力革命をもたらし、その発展を支えました。まさに、城は市民のものとなったのです。



火力発電所前での記念撮影写真

[行田市郷土博物館蔵]

I 北武蔵三城—忍・川越・岩槻—

中世以降、埼玉県域には松山城^{はちがた}、鉢形城^{きさい}、騎西城、深谷城など、多数の城が築られました。これらの城は、天正18年(1590)の徳川家康の関東移封後、家臣団の居城としてしばらく用いられましたが、江戸時代に入ると忍、川越、岩槻の3城に整理されます。残された3つの城は、江戸防衛上のとくに重要な城とされ、歴代の城主には幕府を支える幕閣^{ばつかく}が入ることが多かったため、「老中の城」とも呼ばれました。

その城下町は、江戸時代を通して藩の流通と経済の中心地として整備され、発展していきました。



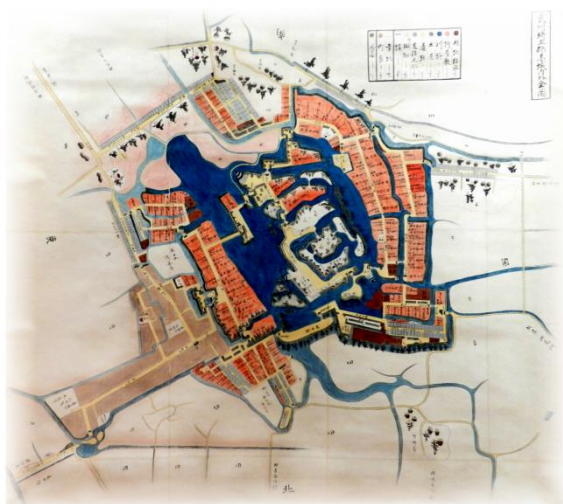
忍城水攻めの様子を再現した地図。戦国時代以来の軍事拠点であったことがわかります。

(古文書 飯島徳蔵氏収集 645)

1. 忍城と城下町

文明年間（1469～1486）頃に築かれたとされる忍城は、利根川と元荒川に囲まれた低地に立地し、石垣こそ用いないものの、周囲に水堀を幾重にもめぐらした堅城です。

城主の阿部正武は元禄15年（1702）までに、櫓の新築などの大修築と城下町の拡張を行って、日光脇往還に沿った上町・下町・新町と八幡町の4町を置いたほか、北谷にも町場を新設しました。城絵図からは武士団が城を囲んで円形に配置されていたことがわかります。城下町の規模は川越や岩槻に比べて小さいですが、中山道の熊谷宿を支配していたので消費活動を補うことができました。



阿部家時代の忍城とその城下町を描いた絵図です。城下町は、城の東部（図では左下）にあり、逆L字形をしていました。（複製 原資料：学習院大学蔵）



忍城の城郭のみを描いた、軍学的関心で製作されたものと推測される絵図です。

（古文書 小室家文書741）

2. 川越城と城下町

川越城は、戦国時代には小田原北条氏が北武蔵へ勢力を伸ばす契機となった「河越合戦」（いわゆる河越夜戦）が行われるなどの要地でした。

近世の歴代城主のうち、城と城下町の整備に力を注いだのは、寛永16年（1639）に藩主となった松平信綱です。入城前年に発生した大火災によって城下町の大半が焼失していた川越は、信綱によって復興がなされます。その町割は、上級家臣の侍屋敷を城の大手口前に、足軽・中間などの下級家臣を城下出入口の街道筋に配置し、西大手口（正門）前に南北10ヶ町と4門前町が設けられました。また、防禦のために、新たな曲輪や櫓、門が設けられ、道路の要所には鍵の手、丁字路が配されます。

信綱が整備した町割は、幕末まで踏襲されました。

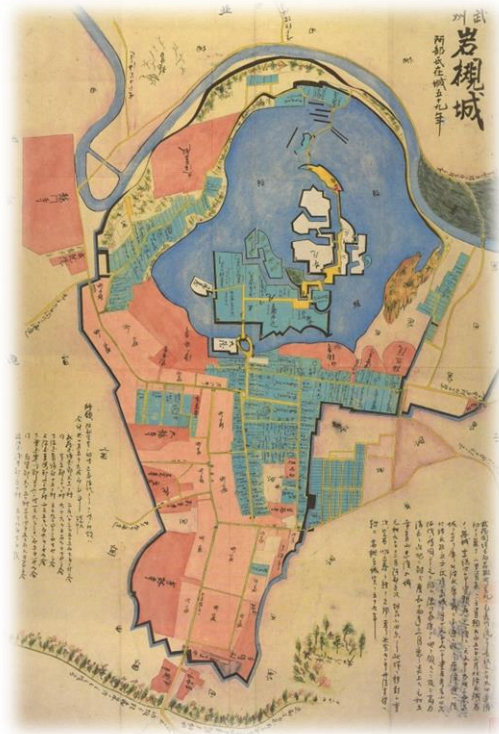


江戸時代の絵図の写しを、川越図書館が複製したものです。元禄7年（1702）とありますが、記載人名などから元禄15年以後の城下町を描いたものと思われる。（地図 川越50 原資料：川越市立図書館蔵）

3. 岩槻城と城下町

岩槻城は、鎌倉街道中道の元荒川渡河点に15世紀の中ころ、築城されたと考えられています。小田原北条氏の支配下、豊臣秀吉との対決を見越して城普請が進められ、城と城下町を囲む「大構」が構築されます。これは堀と土塁によって街道と町場を郭内に包括するもので、小田原城にもみられる防禦施設です。

江戸時代の岩槻城は、歴代将軍が日光東照宮へ社参するための日光御成道が通り、社参の際には将軍が宿泊する重要な城でした。近世の城絵図には、大手門の近辺に武家屋敷、日光御成道の街道筋にL字形に町屋が並び、城郭外縁に寺社地を配している様子が示されています。町立ては市宿、久保宿、渋江、横町、富士宿、林道、田中、新曲輪、新町の9町あり、北武蔵東部の流通の中心地となりました。



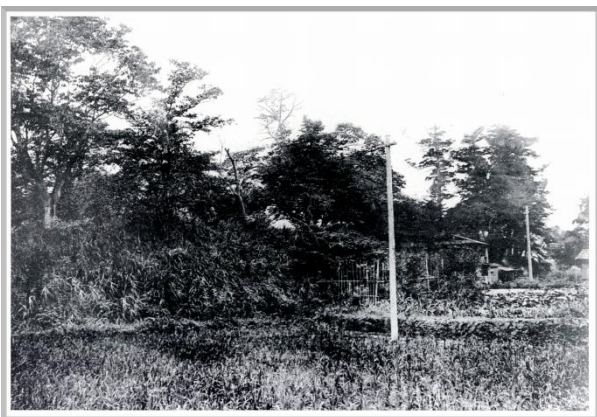
家臣の姓名などから寛文8年(1668)頃、阿部家が藩主であった時代の岩槻城と城下町を描いた絵図です。

(地図 県1417 原資料：福山城博物館蔵)

II 近代化される城・町

慶応4年(1868)9月に明治と改元され、新政府によって政治体制が一新され、大名や旗本の領地支配が終わりを告げます。明治政府は、「殖産興業」「富国強兵」「文明開化」の旗を掲げ、政治、経済、教育、軍事などの各分野で近代化(欧米化)を推進しました。

北武蔵の3つの城も破却され、城下町とともに近代化の波を受けました。城郭は明治の中ごろまでに、公共施設の用地や宅地、田畑へ変貌しました。その一方で、旧城下町は古い町割りを踏襲したままで、近代化という課題に直面しました。大規模な再開発は鉄道の敷設以降となります。



明治末年ころの忍城跡



明治末年ころの岩槻城跡

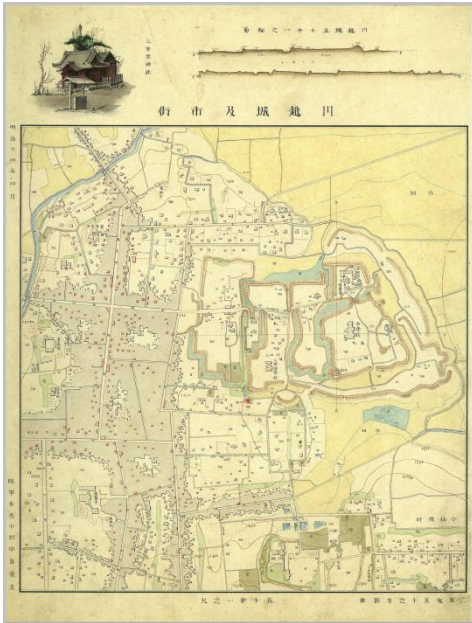
(いずれも『埼玉県写真帳』所収)

1. 城郭の破却と跡地の利用

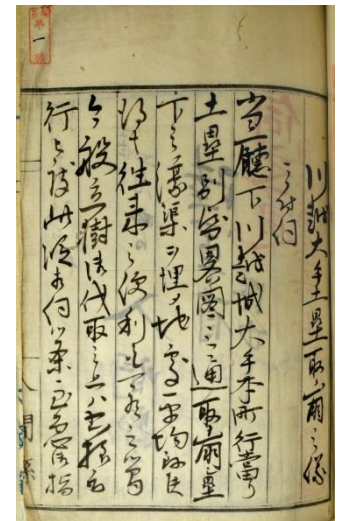
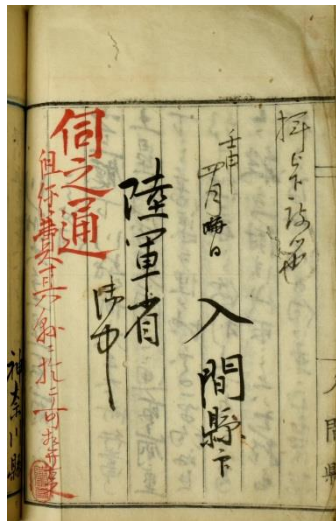
全国各地の城は、廃藩置県とともに兵部省の管理下に置かれ、兵事で利用する城以外は明治6年（1873）の廃城令に基づき、売却のため、大蔵省に移管されて処分されることとなりました。しかし、櫓や門、御殿や蔵などの建築物を解体する予算がなかったため、用材を入札にかけて、落札者の責任で解体が行われました。また、堀は土塁を崩して埋め立てられ、道路に姿を変えました。

かつての本丸や二の丸などの広大な跡地には、郡役所や町役場、学校などの公共施設が建てられ、町の近代化の推進に大いに役立ちました。

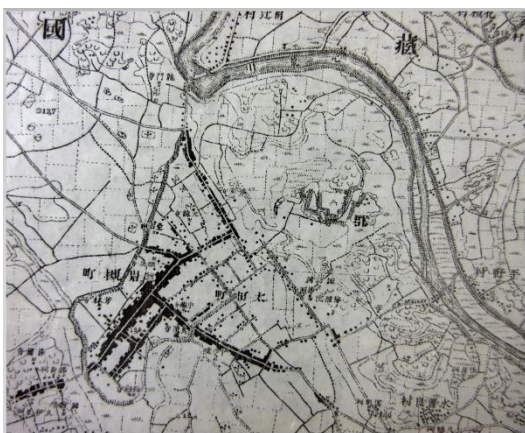
奇跡的に残された川越城本丸御殿や岩槻城の黒門などは大切な文化遺産となりました。



明治14年（1881）に作成された川越城跡と市街の地図です。城跡は学校用地等に転用されています。（地図 迅原508）

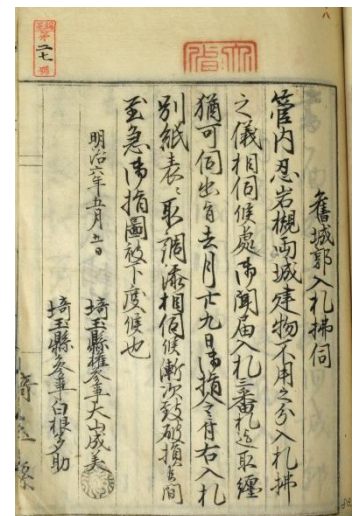
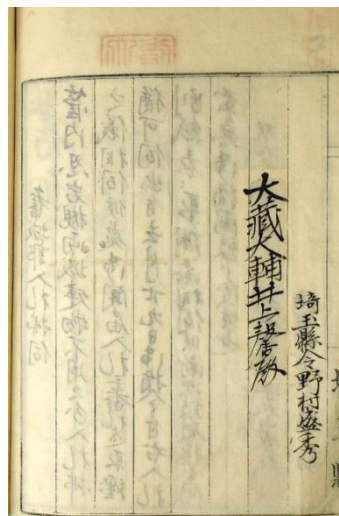


入間県から城郭の管理をしていた陸軍省へ宛てた川越城本町（西大手門付近）の土塁取り崩し、ならびに堀の埋立についての伺いです。陸軍省からは、許可するが経費は県側の負担との回答がなされました。（行政文書 明1707-1）



明治20年（1887）の岩槻城と城下町です。水をたたえていた堀は埋め立てられ、広大な水田へと姿を変えています。

（地図 迅G20 岩槻1 部分）

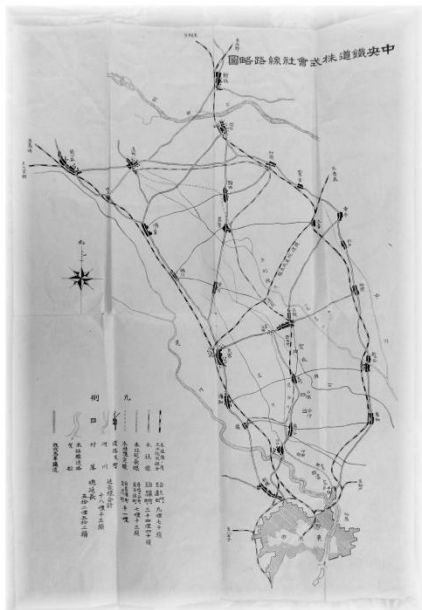


廃城令を受け、忍・岩槻両城の建物の入札について埼玉県から大蔵省へ出された伺い書です。（行政文書 明1692-27）

2. 城下町から近代都市へ—多くの障害をのりこえて—

城と城下町に設けられた堀、土塁、鍵の手のある道路などの防衛施設は、近代都市へ発展する際の大きな障害となりました。旧城下町では、商家の敷地が細分化されていたため、再開発はなかなか進みませんでした。しかし、明治末期から大正期にかけて、夜間営業の照明や工場の動力源として電力をいち早く導入したのは、この城下町でした。

一大転機は鉄道の開通でした。鉄道は市街地を避けて郊外に敷設されたので、駅周辺に新たな商業中心地を建設することができました。また、昭和初期頃から、旧市街地の外側に新しい住宅街や工業団地が建設されていきました。



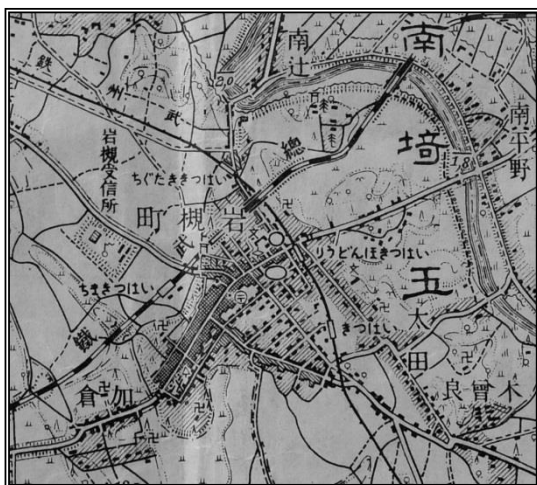
川口から忍までを結ぼうとした武州鉄道の路線計画図（大正前期頃）です。しかし、財政悪化などにより、この計画は実現されませんでした。

（古文書 飯野家358）

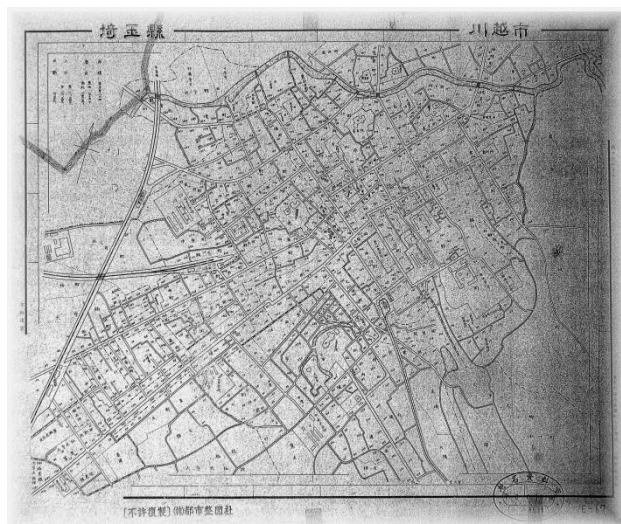


忍町の様子を、地番とともに子細に記した地図です。昭和5年（1930）に発行されました。

（古文書 坂本氏収集1）



昭和5年発行の5万分の1地形図「大宮」です。岩槻町内を、総武鉄道と武州鉄道の2本の鉄道が走っています。武州鉄道は珍しく市街地に近接して敷設されました。（古文書 山崎氏収集426 部分）



戦前期、火災保険料率算定のため都市部を対象に「火災保険特殊地図」（火保図）とよばれる地図が作製されました。本図は昭和3年（1928）の川越市街ですが、川越街道に鍵の手が残されています。（地図 地図1176）

Ⅲ 城下町のいま

明治の文明開化以降、3つの旧城下町はそれぞれ三者三様の近代化を遂げていきました。幸い、これらの旧城下町は、大震災や第二次世界大戦による被害が小さく、その街並みを戦後へ継承しました。そして、戦後の高度経済成長期に、旧城下町は大きく発展していきます。その様子は、戦後間もなく米軍が撮影した空中写真、昭和41年（1966）から平成7年（1995）の間、埼玉県が撮影した全県航空写真に収められ、変遷を容易に追うことができます。

都市化が進んだ現在、旧城下町を有する3つの市では、都市計画法に基づく都市計画図を作製しています。その土地利用には、旧城下町特有の事情を垣間見ることができます。また、城郭と城下町の保存・活用とそれを活かした観光に力を入れています。

1. 行田市



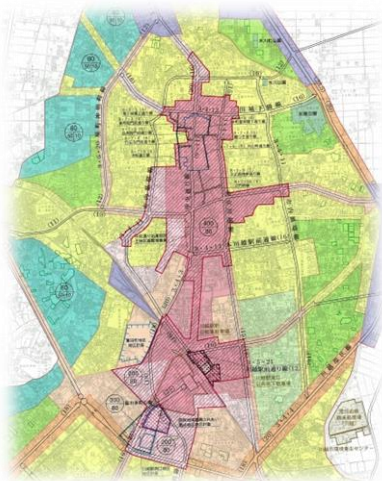
米軍によって撮影された昭和22年（1947）の忍町の空中写真。（航空写真 空中5227 部分）



郷土学習のために、行田市郷土博物館が製作した下敷きです。表面が「明治六年調整忍城図」、裏面が「文政年間忍城図」となっています。

（行田市郷土博物館寄贈）

2. 川越市



平成25年の「川越市都市計画図」。度々大火に見舞われた川越市では、市街地を準防火地域に指定し、防火に努めてきました。蔵造りの町並みは重要伝統的建造物群保存地区に指定され、観光客で賑わっています。

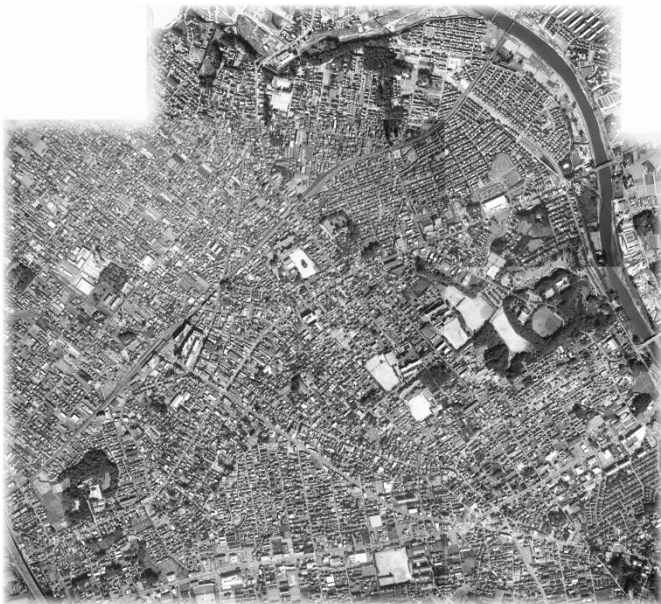
（地図 川越418 部分）



埼玉県撮影の航空写真。昭和45年（1970）の川越市街です。商業地域が南側へ拡大しています。

（航空写真 S45 A-21A-18 部分）

3. さいたま市岩槻区



平成7年の岩槻市の航空写真。城の中心部は住宅地に変わっていますが、新曲輪と鍛冶曲輪の跡が岩槻城址公園（写真右側緑地）として保存・整備されています。

（航空写真 H7 A-31A-51・52 合成図）



大正14（1925）に埼玉県指定史跡となった新曲輪は、岩槻城址公園として市民の憩いの場となっています。



岩槻城の城門（黒門）です。廃城時に移築され、県庁で使用されましたが、現在は岩槻城址公園内に保存されています。さいたま市指定文化財。

エピローグ 城下町 —伝統都市の未来—

明治維新以降のここ100年余りの間に、東京に近い地域では人口が増加し、都市基盤の整備が課題となっています。しかし、500年を超える歴史を有する、行田・川越・岩槻の3市区が有する城下町特有の歴史・文化と風格は、何物にも代えがたい固有のものです。こうした歴史環境を保護、活用することによって、住んで幸せ、来て見て魅力的な都市になることを望む人は決して少なくないでしょう。



川越城本丸御殿



忍城御三階櫓（再建）



岩槻城下の象徴 時の鐘

[編集・発行：埼玉県立文書館]

[写真・資料提供：大久根 茂

鈴木紀三雄 行田市郷土博物館]